

こたらい ちよつとむかし

あけましておめでと〜びぎいます。
今年は、これまでに皆さんからいた
いたお便りの中から、タマおばあさんが
玉川上水に関する質問に答える形でま
めてみました。



Q 昔の玉川上水はどんな所だったの？
A 今はいろいろな種類の木がたくさん生えて

いるけれど、昔は桜と松の木ぐらしかなかったんだよ。
玉川上水の両側は、芝

生のような草が生えている土手で、桜の木がずうっと一列に植えられていてね。ところどころには大きな松の木があったの。

玉川上水にかかっている橋の上に立つと、向こうの橋が見えるぐらい遠くまで見渡せたよ。今みたいな柵もなく、きれいな澄んだ水がどうとうと流れていたの。みんな玉川上水のことを大堀と呼んでいたらしいからね。流れも急で、落ちたら助からないから、「子どもは大堀に近寄ってはいけないよ」と言われてたの。
でもね、春になると土手の桜が咲いて、それは見事だったんだよ。それで、お花見の名所だったの。

Q お花見はどんなだったの？

A 玉川上水の両側は花見客でいっぱいだったよ。東京（都内）からだけじゃなくて、所沢や清瀬など方々から来てね、それはにぎやかだったの。

桜が特にきれいなのは喜平橋から小金井橋のあたりでね、花見客は橋から橋に向かって桜の木の下をみんな歩いたんだよ。その花見客相手に、通り道の農家はお店を出したんだよ。土手や自分の家の庭先に赤い布をかいた縁台を出して売っているのもあれば、家の軒先へのれんを下げたお店のようにしているところもあったね。そののれんが大きくて、紫や赤の布にお酒の名前や桜の花の柄が白く染め抜いてあつ

て、きれいだっつたよ。農家ではのり巻きやおいなりさん、卵焼き、たけのこや里芋の煮物なんかを作ってたね。作るだけじゃなくて、お酒やビール、ふ菓子や桜のかんざしを仕入れて売ってたんだよ。ふ菓子はサクランボウって言うてね、今のふ菓子より長くて桜の棒みたいだからサクランボウって呼んでいたのかね。わたしは子どものころそれを買ってもらうのがとっても楽しかったの。

桜のかんざしは細い棒に紙で作った花がら、6輪付いていて、小金井橋下げてあるの。それを女の子が買って、髪にさして歩くの。みんな帰りの電車の中でもさしているから、ほかの人にも花見



に行っちゃってすぐわかんないよ。
土手では家から持ってきたごちそうを広げてお酒を飲んでる人もたくさんいてね、酔っ払った人が時々玉川上水に落ちて、村の青年団が物干しざおなかで助けたことおぼろげに聞いたよ。三味線を弾く人や万歳などの芸をする人たちも来てね。それはそれはにぎやかだったの。

て、村の青年団が物干しざおなかで助けたことおぼろげに聞いたよ。三味線を弾く人や万歳などの芸をする人たちも来てね。それはそれはにぎやかだったの。

Q 小平では玉川上水の水を飲んでたの？

A そうだよ。でもね、玉川上水から直接水をくむんじゃないんだよ。上水から分けた用水が小平のあちこちを流っていてね、そこから使ってたの。玉川上水のすぐそばの人でも上水のすぐ横を流れる新堀用水から水をくんで、上水からはくまなかったの。上水は大堀、用水は小川とか呼んでたのね。用水は本当に小さな川で、うちでは家のすぐ後ろを通っていたよ。使いやすいように川の岸を少し掘り下げて、下になりられるようになったの。

わたしが子どものころは朝一番にする仕事は水



くみなの。まだだれも用水を使わない時間に水をくんで台所の水がめに入れておいて、それを飲んだり料理をするときに使ったんだよ。ふろの水も用水からくむんだけど、ふろおけをいっぱいにするには、何回も往復しな

きゃならなくて、ほんとうに重労働だったよ。雨が降ると水が濁ってしまいうんで、降る前に夜中まで水をくみに行かなきゃならないし、寒いときには水が張って、それを割ってくむんだからたいへんな仕事だったよ。

Q そのほかの水の思い出は？

A そうだね。ふだんはないんだけど、梅雨や秋の長雨のあとなんかには、出水が出たの。出水とか野水とか言うんだけど、雨がさんさん降って、雨水がたまった所に、地下からまた水がわき出して大きな池になっちゃうんだよ。わき出した水だから、冷たくてほんとうにきれいな水なの。わたしの兄さんは泳ぎが好きでね、「出水は冷たくて体に悪いから遊んじゃいけないよ」と言われてたのに、いつも親にないしょで泳ぎに行っちゃうんだよ。出水はだんだん引いていくものだけど、2か月ぐらいいも水が引か

ないことがあったの。畑だったところが急に湖のようになっちゃって、鴨まで飛んできてたからね。なんだか不思議な気がしたよ。それがほんとうにきれいな景色だったから、今でも忘れられない思い出なんだよ。
用水は今でもところどころに残っているね。青梅街道から少し入った両側や回田町、鈴木町、大沼町にもあるね。今は水が流れていない所もある



昔は春になると村で日にちを決めて、用水路の掃除をしたの。沼げとか沼さらいとか言うんだけど、何日か前に分水口をふさいで、水を干上がらせて、村じゅう総出で底にたまった泥や落ち葉を取り除くの。そのとき、ところどころにできた水たまりに魚が集まっていた、子どもたちが素手でつかみ取るの。それがとっても楽しめで、学校が終わるとみんな駆け足で帰ってきて、用水に急いだんだよ。



タマおばあさんのお話、いかがでしたか？
ご感想を小平民話の会（高津 042（343）6077）または広報広聴課まで、どうぞお寄せください。

Q 小平に、井戸はなかったの？

A 井戸はそんなにたくさんはなかったの。小平は相当深く掘らないと地下水が出ない所だね。当時は井戸を掘るのがたいへんで、何軒かでいっしょに使う共同のものか、お金持ちの家ぐらいいしかなかったの。だから井戸があると、お嫁さんが楽だといって、娘を持つ親は井戸のある家に

嫁にやりたいなんて言ったものだよ。
なべやかまを洗ったり、洗濯をするにも用水を使っていたんだよ。それでも「水は三尺流れば清水」と言っていてあまり気にせず飲んでたの。けど何回も赤痢やチフスなんかの伝染病がはやってね、用水でみんなうつつてしまったの。それでこの家でも井戸を掘るようになったんだよ。

けど、昔はそれはきれいな水で、コイやハヤ、サワガニ、ゲバチなんかがいたよ。アユが泳いでいたこともあったね。
昔は春になると村で日にちを決めて、用水路の掃除をしたの。沼げとか沼さらいとか言うんだけど、何日か前に分水口をふさいで、水を干上がらせて、村じゅう総出で底にたまった泥や落ち葉を取り除くの。そのとき、ところどころにできた水たまりに魚が集まっていた、子どもたちが素手でつかみ取るの。それがとっても楽しめで、学校が終わるとみんな駆け足で帰ってきて、用水に急いだんだよ。